

ではなく、民主主義のより一層の推進と徹底した分権化によって住民がその住む地方を単位に、より身丈に合った社会福祉国家の見直しに着手している点は、大いに見習うべき点である。

最後に、強い印象を受けたのは、スウェーデンを代表するウプサラ大学やノルウェーを代表するベルゲン大学の専門家とのディスカッションで得たことであるが、政治学者が福祉国家体制の変容と、民主政治の実際運用を毎年、特定の基準に基づいて調査し、政策提言を行っている点であった。

今回の調査旅行によって、北欧の社会福祉国家の変容過程を実際に政策当局者に面談して研究できたこともさることながら、最近、世界の政治学界の先端を走る北欧の政治学者達と知己になり、ディスカッションできたこと、学術の相互交流の環境作りができたことは我が研究所の将来にとって何よりの収穫であった。

この報告の最後に、今回の調査のスケジュールをアレンジして下さったスウェーデンのルンド大学のグスタフソン教授と穴見教授に心から感謝申しあげたい。

研究班報告 2 戦間期政治の国際比較研究

戦間期の三つの史料

坂井雄吉

戦間期政治の国際比較というわが研究班の共通課題に関連して、ここには本年度中に筆者の身辺で進行した三つの仕事について報告しておくこととしたい。いずれも史料の整理あるいは収集といった種類の仕事であり、従って本稿も研究成果とよべるほどのものではないが、ともあれ何がしか史料紹介程度の意味を持ち得るならば幸いである。

一つは、先年亡くなられた岡義武氏旧蔵の図書および資料である。人も知る通り、氏はその後半生において専ら日本に重点を移されたとはいえ、その前半、つまり研究生活を始められた昭和初年からほぼ敗戦前後の頃まで、まさしく戦間期の当時にはヨーロッパの近代政治史を主たる研究対象とされ、同時に国際政治史の分野にも強い関心を向けられていた。

ふとした行き掛りから残された氏の蔵書と資料類の整理を仰せつかった筆者は、安、藤木両教授らの協力を得て1995、96年度に文部省科研費の交付を受け、アルバイトのお嬢さんに岡家に通ってもらって、先ず蔵書のカード化を進めた。そして97年春以降は、ほぼ完了したカード化作業のあとを受けて、これを並べかえ、目録の形に整備するための準備に当たってきたが、漸く年度末に至って一通り仮

目録の完成に漕ぎつけることができた。なお、ちなみにパンフレット、原稿、メモその他蔵書と区別された資料的部分は、東京大学法学部付属の史料センターに収められ、その方で整理が進められることとなっている。

蔵書の総数はおよそ7,000点、そのうち英独仏語を主とする洋書が約2,000点余というところであろうか。その内容にも多少ふれておくとするれば、やはり先ず注目をひくのが戦間期刊行の洋書であろう。英独仏米など主要各国の政治史についてスタンダードな文献・史料類が揃えられていることはいうまでもないが、客観性を重視された氏の学風にふさわしく、全体として収集が幅広く、かなりの程度まで網羅的に行われている点は、その一つの大きな特徴と見ることができる。

また、その中で氏の初期の問題関心を反映して、特に密度が高いと思われる領域もないではない。その一つがヨーロッパ諸国の労働運動、社会主義政党に関する文献であり、第二にはナチズムを中心としてナショナリズム、帝国主義あるいは国際政治に関連する領域である。なお、さらにつけ加えるとすれば、イギリス史学、特にその伝記的研究に向けられた氏の関心もまた、蔵書の中に明らかに見て

とることができよう。

一方、和書についてみれば、5,000点にのぼるそのほとんどは、『近代日本政治史』続篇執筆のために精選されたと思われる刊行史料の類で占められている。つまり一旦整理された上で残された大正から昭和戦後に至る文献、史料が和書の主力をなすが、大小組織の機関誌の類まで含めたその収集は、事実後進の一人として驚嘆の念を禁じ得ないほどの密度を示している。

このような氏の旧蔵書、いわば「岡文庫」の価値は、決して単にその古さ、あるいは稀少性にのみ限られるものではないであろう。それらは戦間期世界政治の生きた証言そのものであり、同時に、岡政治史学の形成過程を解き明かすかけ替えのない資料でもあることが忘れられてはなるまい。整理のあといずれに落ち着くにせよ、何よりもそれがまとまった形で保管されることを、生前氏御自身も強く希望されていたことを最後に申し添えておきたい。

第二の仕事として取り組んできたのは、顧維鈞の回想録である。断わるまでもなく顧維鈞の名は中華民国切っの著名な外交官として知られ、特に国際連盟を舞台に展開された彼の外交は、日本帝国主義に対する抵抗として最も一貫した立場の一つを代表するものであった。

その顧維鈞の遺したのが、英文タイプ版で1万頁にのぼる生涯の回想録である。1970年代に彼の母校コロンビア大学の極東研究所が企画し、彼とのインタビューを延々と重ねることによってそれは作成された。そしてその全文が実は中国語に翻訳され、『顧維鈞回憶録』と題して刊行されているが（中国社会科学院近代史研究所訳、中華書局出版、全13巻、1983年～1994年）日本語はおろか、オリジナルの英語版もお公刊には至っていない。

英文タイプ版の一部（約2,000頁）のコピーがわれわれの手に入ったのは、1997年初めのことであった。中国からの留学生、高克君が満州事変をめぐる顧維鈞外交を博士論文のテーマに選んだ関係から、彼を通して入手されたもので、現にそのコピーは書入れその他から

判断するに、中国語訳を作成する際に使用された底本そのものであったと推測される。入手された2,000頁はちょうど中国語訳の二巻分に相当するが、年代的に言えば、1888年の彼の出生から1937年末、つまり日中戦争における南京陥落直前までの時期がそこでは扱われている。

筆者は早速春から夏にかけてこれを通読する一方、大学院の授業でもこれをテキストとして使用することとし、台湾からの留学生二人がこれに参加したのを幸い、英語版と中国語訳を対照しながら読み進むという試みをも続けてきたが、内容は極めて率直かつ細密にわたり、少なくとも顧維鈞外交の何たるかを知るに十分な、いや充分すぎるほどの情報を含むことは疑いを容れない。

外交だけでもない。米国留学から帰国後直ちに官途についた彼は、袁世凱時代の北京政府内部で頭角を現わし、20年代には外相、蔵相、首相などを歴任する。それらは通常知られることの少ない当時の中国の内情、また内政面の動きをうかがう手がかりとしても貴重であり、またそうした中で、張作霖と彼との特殊な近さという点も興味深い。しかも北伐後は蒋介石政権の下でも一種不倒翁的存在として活動を続けてゆく。民国時代を一貫した彼の外交活動と、背後にある中国内部の政治状況、人脈変動との関連という問題は、この回想録を通じて浮び上る興味の一つの焦点といえることができる。

外交そのものに関していえば、国際連盟の舞台を中心に展開される彼の対日連合戦線形成への動きこそは回想録の最大の中心点をなすであろう。よく知られていることながら、対日制裁に向けて消極的な姿勢を崩さないヨーロッパ諸国を前に、彼が米国を連合戦線に引き入れるべくいかに苦慮を重ねるか。まことに単純明快な戦略論ながら、しかし結局は太平洋戦争へと進んだ国際政治の力学を考え合わせるならば、彼の回想録をあらためて精読する価値は決して少なくないというべきである。

しかも敢えてつけ加えるなら、彼のように中華民国、国民党系の路線を一貫して歩み続

けたあと、人民中国の出現に直面して挫折した人物の証言が、今日ただそれだけの理由で軽視されることがあるとすれば、それは結局のところ歴史学のあるべき姿とはいえないのではないであろうか。

このあと、あらためてコロンビア大学と直接に接触し、英文版の残り全文を入手したいとわれわれは考えている。

最後に、これまたふとした機縁で東京日日新聞とその後身、毎日新聞の地方版コレクションが入手され、その整理が進められたことにもふれておきたい。

そのカバーする時期はほぼ大正初年から昭和30年代初めまで、そして地方版とはいいいながら主として静岡以東あるいは以北の東日本各地域に限られるが、日々の各地方版が完全に洩れなく製本されており、まぎれもなくそれは東京日日および毎日新聞の本社が保存用資料として製本、保管してきたものと考えることができる。

量的にもまことに尠大であり、7～8センチの厚さに製本された冊数が835冊に達する。総重量はゆうに4トンを超えるのではないか、搬入には3トン・トラックが2日間にわたって動員された。そして建物に影響が出てはいけないということで、今のところ恐る恐る研究管理棟内の3ヶ所に分散して安置されてい

るが、何とか大地震が起らなければよいがとひたすら祈るばかりの毎日である。

搬入は本年度夏休み直前のことであったが、それ以来とりあえず政治学科の手で整理が進められ、12月に至って仮目録も完成することとなった。やがて本学図書館の保存書庫が完成の上はそちらに正式に移管されることもすでに決まっている。

その史料価値については、おそらく蛇足を加える必要もあるまい。要するに「地方版」という点に、このコレクションの魅力があることは明らかである。主要な新聞の中央版ならば今日、マイクロその他閲覧の便宜もかなり整備されているが、地方版ともなれば話は別であり、しかも特定地域の地方版のみならず東日本各地のそれが網羅的に綴じ込まれている点からして、その稀少性たるや事実他に類を見ないものとするということができよう。

それが大正から昭和にかけての地方史研究にとって有力な史料であることは断わるまでもないとして、またそれは同時に比較地方史という関心にも応える貴重な情報を提供するであろう。さらにその上、メディアとして、あるいは経営としての新聞発達史という観点からも、今後多くの研究者にとって興味の的となることは先ず間違いのないところと考えられる。

研究班報告 3 政治とマス・メディアの国際比較研究

吉野作造の「民族競争」論

—欧米留学後最初の『新日本』掲載論説をめぐって—

和田 守

一、

このところ、明治末期から大正期にかけて(20世紀はじめの20年間ほど)の雑誌に目を通すことに力を注いでいる。そのなかで思わぬ掘り出し物にぶつかり、小躍りすることがある。『新日本』第3巻第11号(大正2年10月15日)の秋季増刊「世界民族号」は、その1つである。『新日本』は、日露戦後に東西文明調和論を提唱していた大隈重信の主宰により1911年(明治44)4月に創刊した雑誌で、

前年ヨーロッパ留学を終えて帰国し早稲田大学教授に就任した新進気鋭の永井柳太郎(社会政策・植民政策担当)が主筆兼編集長をつとめていた。

全352ページに及ぶ大特集を組んだ「世界民族号」は、I. 世界民族文明の歴史上地理上の観察、II. 今日の民族競争、III. 今日の民族問題、IV. 日本民族八面観、V. 民族と民族性、VI. 民族の女、VII. 亡国の文明民族及び原始民族、VIII. 民族と芸術という8つの